

# 大川市長と津森国交省所長がトップ対談 「渡良瀬遊水地を賢く活用しよう」



渡良瀬遊水地は、ラムサール条約湿地に登録されたこの10年余で、治水と豊かな自然を両立させながら、スポーツなど市民の活動と憩いの拠点に役割が広がりました。さらに賢く市民の暮らしに活用しよう。大川秀子市長と、国交省利根川上流河川事務所（利根上）の津森貴行所長が、将来像と、洪水から守る流域治水をテーマに話し合いました。

——はじめに、渡良瀬遊水地との関わりをお話ください

**大川** 2010年に一市三町が合併して新生栃木市が誕生しました。渡良瀬遊水地は、広大な自然が脚光を浴びて市の「宝」になりました。しかし、当時市議会議長だった私にとって、ラムサール条約登録までの道のりは大変険しいものでした。

**津森** 私の関わりはまだ浅い状態です。約20年前、江戸川河川事務所の課長の時に、下流の立場から、洪水を貯め水利用の貯水もする治水・利水の役割をもっていと理解していました。本省の流水管理室長の時には、遊水地を含めた全国の多目的ダムの管理を担当していました。昨年からは利根上の所長になり、歴史的な経緯と自然環境なども理解を深めることになりました。

**大川** 話しのはじまりは、合併の年に自

「交流・学習」では、保全・利活用協議会を基盤にアクセスの向上、環境教育などが検討されています。私たちも、皆さんとともに長い目で見て取り組みを先につなげていきたいと思っています。

**大川** 「賢明な利用」では、栃木市にも遊水地のヨシを使ったヨシズのプロダクサーがおります。温暖化の中、猛暑にヨシズが果たす役割は大きく、ヨシ灯りのイベントでは子どもたちにヨシの良さに触れてもらっています。また、利根上さんのご協力で市藤岡渡良瀬運動公園が活用でき、熱気球の係留飛行や自転車イベントも活発です。陸水空のスポーツが楽しめる地域活性化に繋がっています。

ラムサール登録後10年のあゆみ	
2012年7月	ラムサール条約登録・「わたフェス」初開催
2013年3月	震災で中断のヨシ焼きが3年ぶりに復活
2014年5月	天皇・皇后両陛下が遊水地・足尾を訪問
2015年9月	関東・東北豪雨で巴波川が氾濫
2018年4月	栃木市の「ハートランド城」が開館
2019年10月	台風19号で遊水地の貯留量が過去最大
2020年6月	遊水地生まれのコウノトリのヒナが初誕生
2021年4月	栃木市が熱気球の係留飛行を開始
2022年2月	栃木市側に人工巣塔を2基設置
2022年10月	谷中湖などが「恋人の聖地」に選定

## 問 渡良瀬遊水地課 ☎620919

然を守る会から出されたラムサール登録の陳情書でした。しかし、大事な治水の機能がどうなるのか心配の声も強く、説明会などは紛糾。議会では一年間の継続審議になりました。

議長になっての最大の課題。「自然を守りながら治水も守れないか」と考えました。確認するために、国交省や環境省に足を運びました。決定的だったのが翌年の3月11日。常任委員の議員たちと環境省の職員と協議のために永田町に向か



対談は7月末に、前半は谷中湖を望む遊水地で、後半は市ハートランド城で開催

「交流・学習」では、地元の小学生が学習や研究、発表を重ねており、市全体に広げたいですね。「保全・再生」で、ヨシ焼きが2年前に中止になった時、良質なヨシが育ちませんでした。後継者も含めて継続に努めます。

## コウノトリに子育てを学ぶ

——こうした取り組みの成果の一つが、コウノトリの定着ですね

**津森** 2020年、河川の敷地では初めてひなが誕生して感動しました。それが4年間も続いているのは素晴らしいことです。ラムサール条約湿地登録の趣旨である「水鳥の生息地として重要」に照らし、遊水地の良好な環境を表してくれていますね。環境の保全に取り組む人々の励みになります。

市長さんがおっしゃる子どもの多面的な学びにも繋がります。自然を愛でる、

い、地下鉄の駅で東日本大震災に遭ったのです。余震が続く中、何とか「登録後も治水工事はできる」と両立の確約がとれ、採択に至りました。登録後に会った治水派の代表の方が「大変だったな」と言ってくれたのが思いがけない言葉で、今でも思い出すと涙がでます。

## 治水と環境の両立が出発点

——その治水と環境の両立が、出発点であり今後も目標ですね

**津森** 私は、遊水地が出来た歴史的な経緯と重みを、しっかりと認識しなければと思っています。約100年前、治水のために遊水地ができ、約50年前、調節池水池化して水利用の機能をもちました。

環境の目的・役割ももつようになりませんが、登録以前の経緯を認識しておく必要があります。利根上では、2000年に遊水地の環境の将

生き物を愛でる心は、自然に接して初めて育まれます。

**大川** 私は、日本で直面する少子化問題で、コウノトリに学ぶことがいっぱいあると思っています。子育てを見ていると、卵を温めるのも、餌を取ってきて与えるのも、お父さんとお母さんが平等、対等にやります。また、安心して子育てできるのは食べ物があるから。人間に例えれば経済力です。私たちも、夫婦と一緒に子育てをし、負担を減らす支援をする必要があると実感しています。

栃木市でも昨年、利根上さんの許可を得て、人工巣塔が2基、設置されました。第1調節池の巣塔では、オスの「カズ」が足環のない1羽と2年続けて巣作り。第3調節池でも、コウノトリが2羽、巣塔にとまったと報告されています。今後強く期待しています。

## 遊水地の魅力をさらに磨く

——大川市長が保全・利活用協議会の会長に就任しました。取り組み方針は

**大川** 協議会は4市2町や治水団体、環境保護団体などが参加して、意見を交わ

来像を「グランドデザイン」にまとめました。2002年に関係者による湿地保全の検討委員会を設立し、2010年には湿地保全再生の「基本計画」をまとめました。これらが下敷きとなる中、湿地登録の局面では、賛否両論の自己主張の応酬に終始するのでなく、関係者が協力して前に向かう関係を築きました。

その当時、利根上も議論の間に入って、関係する方々がこれらに向けて認識を合わせる、誓約をする関係が実現されました。そこでは、▽治水事業は何ものにも優先されなければならない課題▽掘削によって治水事業と湿地の保全・再生を両立させる▽それがラムサール条約が目指す「賢明な利用」そのものだ、と明記されました。すごく重みがあり、今後この原則で行動していきます。

**大川** 両立を国から明言してもらえ、私たちも安心できました。

## 活発な活用が花開いた10年

——その上に、ラムサール条約の三つの柱「湿地の保全・再生」「賢明な利用」「交流・学習」が花開きました

**津森** 治水事業と保全・再生を両立させることは、「賢明な利用」そのものです。「保全・再生」では、掘削(32頁に関係記事)や(毎春の)ヨシ焼きを続けていくことが大切だと思っています。

す場です。市の「ハートランドプラン」をはじめ各市町のプランを踏まえつつ、遊水地があつて良かったと思ってもらえる将来ビジョンを作りたいですね。利根上さんのご協力もお願いいたします。

**津森** 遊水地は今後も人が手を加え、関わり、みんなで守り育む必要があります。協議会の役割は重要になりますね。

併せて、遊水地のいろいろな魅力を磨き高めていくことが必要だと感じます。ボート、熱気球などのアクティビティー。違う切り口で、「恋人の聖地」という魅力の発信もあるでしょう。ヨシズのような、通常の観光の視点とは違う価値もあり、さまざまなものを光らせていくことが大事だと感じます。

また、地域外への魅力づくりだけでなく、栃木市民が一層、「遊水地って大事だよな」と思えるようになるのが良いですね。私たちも一緒に取り組みます。

**大川** 「恋人の聖地」には、日本一大きいハート形の谷中湖とハートランド城を申請し、昨年10月に選定されました。この事業の目的は、少子化対策と地域活性化なんです。年末に赤い絨毯の上を2人が手を繋いで熱気球に乗る「カップルフライト」を行ったところ、好評でした。今後もお会いの場作りに活用します。

**津森** 先ほどのコウノトリの子育てのことと、ぴったり繋がってきますね。